

Title	済州島における海女イメージの変遷
Sub Title	A study of the transition of the image of the Jeju Haenyeo
Author	尹, 怡景(Yoon, E Kyung)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.85 (2018.) ,p.19- 40
JaLC DOI	
Abstract	On South Korea's southernmost island called Jeju live women who collect marine products in the sea without the use of any equipment. They are called the Haenyeo. As a result of longstanding efforts, the culture of the Jeju Haenyeo was registered on the UNESCO Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity on November 30, 2016. However, the Haenyeo are aging as a population and are increasingly lacking in successors who can carry their traditions and lifestyle forward into the future. This research initiative attempts to delve into one of the causes of this problem by examining the image of the Haenyeo from the perspective of the outsider. In particular, the paper investigates the image of the Haenyeo from a male-centered or patriarchal perspective.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000085-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

濟州島における海女イメージの変遷
A Study of the transition of the image of
the Jeju Haenyeo

尹 怡 景
E Kyung Yoon

On South Korea's southernmost island called Jeju live women who collect marine products in the sea without the use of any equipment. They are called the Haenyeo. As a result of longstanding efforts, the culture of the Jeju Haenyeo was registered on the UNESCO Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity on November 30, 2016. However, the Haenyeo are aging as a population and are increasingly lacking in successors who can carry their traditions and lifestyle forward into the future. This research initiative attempts to delve into one of the causes of this problem by examining the image of the Haenyeo from the perspective of the outsider. In particular, the paper investigates the image of the Haenyeo from a male-centered or patriarchal perspective.

Key words: Jeju Island, Haenyeo, Muljil, UNESCO, Subaltern
キーワード: 濟州島, 海女, ムルジル, ユネスコ, サバルタン

はじめに

韓国の最南端の島である濟州島には、「海女^{ヘニョ}」という、装備を付けず素潜りで海の中の海産物を採取する女性たちがいる。少なくとも高麗時代から存在していたと見られる海女は、近年、高齢化などに伴い後継者不足が深刻化している。韓国では近年、その存続が危ぶまれる海女¹をめぐり、文化と生業とといった2つの側面での保存のため様々な取り組みを行なっている。2016年11月30日、「濟州海女文化 (Culture of Jeju Haenyeo)」がユネスコ人類無形文化遺産として登載されたことも、そのような取り組みの結果の一つである。

しかし、文化としての海女を保存するための成果²に比べ、生業としての海女の保存については、金銭的または行政面での支援や海女学校のような教育機関を設立するなどの努力にもかかわらず、目立った効果を出せず、後継者不足は続いている。そこには様々な原因³が指摘されているが、本稿では、女性で構成された海女という集団が男性中心又は家父長的な外部の観点からいかに「発見」され「消費」また

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻 博士後期課程2年

は「利用」されてきたのかを辿ってみる。外部から与えられた海女イメージは、必ずしも社会的に好ましいものではないが、彼女たち自身が次第に内面化していった。その上で、近代化が進むにつれて、海女業以外の選択肢ができてからは、厳しい肉体労働である海女業を取って続けたくないと思う若い女性や、あるいは娘にさせたくないと思う親が増えた。これらのことが、後継者不足を生み出したと思われる。

特に、本稿で扱う海女イメージのほとんどは海での肉体労働を行う女性集団に付与されたものであるがゆえに、海への知識や職業集団としての価値よりは、露出の多い服装や神秘的な野性美の持ち主あるいは超人的な力で勤勉に働く労働の女神として一面的な評価を受けるばかりであった。しかし、ユネスコ無形文化遺産登載運動をきっかけに、海女の集団知識やエコフェミニズムとしての生産方式などに注目し、海女の生涯調査報告書をまとめた出版物や現実的な海女の作業姿や海女自身の声を綿密に収めたドキュメンタリー⁴が出ることによって、海女のイメージにも変化が起きている。

本稿では、近代以降の新聞記事や記録物、小説、映画そして観光商品などに表れた海女イメージの変遷に焦点を当てて検討することで、海女のイメージが現在の後継者不足につながった原因の一つとして考えられることを示す。そのうえで、海女のイメージがユネスコ無形文化遺産への登載を境にどのような変化を迎えたのかを検討してみたい。

1 時代と海女のイメージ

(1) 済州島という特殊性

火山島である済州島は本島が、東西約80Km・南北約40Km・海岸線は253Kmで、韓国で最も大きい島である。島の総面積は1,849.3km²で、水田耕作可能な土壌に乏しく、農作地は島の総面積の30.4%に過ぎないほど、水田農業には適さない土壌が大部分である。昔から風・石・女性が多いといい、三多島という別称を持つ。アン(안미정 1998:185)は済州島が有名な観光地になるにつれ、済州海女が「女性が多い島」であることを広報するための良い素材となって象徴化・商品化されてきたと指摘している。海女のイメージについて説明するためには、まず、韓国本土と済州島の関係について簡単に説明する必要がある。済州島の歴史は常に本土に従属した形であり、キム(김태능 1982:515)は「軍馬や良馬の牧畜供給地及び特産物の貢納地であり(蜜柑、鮑、真珠、鹿の革、漢拏山の特殊な木材など)、また数多くの奴婢の身貢により米と布を収める場所、換言すれば、中央にいる支配者の生活費を調達し、贅沢品を提供する地域であり、倭寇防衛の第一線軍役を担う地域だったのである」⁵としている。このような状況の中で、海女は王朝への貢納のため苦勞していた辺境の人間という存在であると同時に儒教思想⁶が根強い社会で露出の多い姿で作業をしていた女性という二重の差別的視線を浴びていた存在でもあった。

(2) 時代による海女の経済活動

海女のイメージ変遷は彼女たちの経済活動の形態と深い関連を持っている。チョ(조혜정)は海女の活動を以下のように大きく4つの時期に分けている⁷。

第一に、「王朝への貢物として、採取物を朝廷に貢ぎ、残りは近所で流通した時期」である。この時期には支配層から過重なるノルマで苦しむ海女に対する哀れみを帯びたまなざしがあった。当時の支配層は、作業する海女の服装を儒教思想に基づいて下品なものと認識していた。そのため、海女たちに対する朝鮮時代の外部イメージは「卑賤で卑しい」⁸ものとしてまとめられる。

第二に、「日本植民地時代（1910～1945）から1970年代に至る産業化の時期」である。海産物が高価の輸出商品になり、海女たちが家計の主要なる支え手として浮かび上がった時期である。この時期からは単純に卑賤で哀れなイメージから脱皮し、当時の経済発展ムードに合わせ、産業の担い手としての一面が強調されてきた。

第三に、「韓国の近代化が進んで海女の数が減っていた時期」である。チョはこの時期から「海の畑」（漁場）が荒れ果て、海女の数も急激に減少したと指摘する。この時期は韓国の高度経済成長期で、済州島は1970年代から国家主導の経済開発体制に入り、70年代後半から観光開発計画が始まり、経済構造が変化し、海女の数も激減した。

第四が「1990年代以降、海女の後継者がいなくなった時期」である。この時期から現在に至るまで、海女の後継者はほとんどいなくなり、かつてセクシーなイメージだった現役海女の高齢化とともに、海女へのイメージも変化し続けた。それにより、海女のイメージは官能的な女性よりは主な担い手の年齢の高齢化と共に済州の母親としての象徴性を持つようになった。

このようなチョの時代区分は簡潔で分かりやすく分けてあるため、済州海女の歴史の流れを把握しやすい。しかし、簡潔にまとめたあまり、単純化しすぎたところがある。例えば、クォン（1996）によると、今の韓国で一般的に広く知られている済州海女のイメージの歴史的起源は済州の海岸村が封建制から資本主義へ変わっていく過程から探るべきである。つまり、現代韓国で知られている海女という存在は日本植民資本主義と一番近い辺境にあって、済州島の「近代化」過程の中で現れた新しい集団であると理解するべきである。1900年初めから済州島民は日本に出稼ぎに行くことになり1938年には当時20万人だった済州島民の1/4に当たる5万人が日本に渡った。出稼ぎに出たのは主に男性であったため、自然に島に残っていた女性の労働の重要性は増加することになった。それと同時に日本の水産物需要増加による水産物商品化は価格上昇と共に海女の収入が家計で占める割合も高くなった。1916年には採集物の共同販売のため、「海女漁業組合」も結成され、海女は近代的組織社会の経験も有するようになった。また、この時期の海女は出稼ぎにも従事するようになり、1937年の記録によると1万300人の海女の中、その年に出稼ぎに出た海女は約5千人に上ったという。従って、現在一般的に知られている海女は日本による資本主義化以前に存在していた海女とは極めて異なる性格を持つと言えるだろう（クォン1996: 233-235）。チョの区分は海女という職業自体の全体的な歴史を語る上で非常によくまとめたものではあるが、封建制と資本主義化以降の異なる性格を述べないまま、時期を区分しているという弱点もある。また、産業化以降の海女を「哀れなイメージから脱皮し産業の担い手としての一面が強調」と述べているが、産業の担い手として強調されながら、同時に肌を出してムルジル（물질）⁹をする海女に対して「小麦色の肌」の官能的な一面が取り上げるといふ矛盾するイメージが共存していたことを見逃している。

上述した弱点の指摘に加えて筆者は、チョが考察した時代区分の次に、ユネスコ無形文化遺産登載への議論が出てきた2000年以降を第五の時期として加える必要があると考える。なぜなら、2000年以降は、海女たちの活動に積極的な観光化が加わり本来の生業の上に海産物採取作業の公演や海女体験などの副業を行い、LCC¹⁰の普及や島を一周するハイキングコースであるオルレキル（올레길）¹¹の開発など若者を含めた幅広い年齢代の観光客が済州を訪れるようになり、各漁村契¹²所属の海女が運営する食堂である海女の家（해녀의 집）の人気も更に増えるなど、その以前の時期とは異なる活動をするようになったからである。

本論では、2000年以降の海女をめぐる新たな動き、その中での海女の後継者問題と海女文化の継承に関して、筆者のフィールドワークを基に論じていく。

ただし、2000年以前の生業としての海女については、マクロな政治経済的な環境によってその位置づけが変わること、そのことによって、海女が社会からどのように見られていたのか（即ち、海女イメージ）も変わると考えるのは妥当であると思われることから、以下で海女イメージの変遷を論じる際にも、2000年以前については、チョの区分に従う。

2 近代化以前の海女

韓国において、海女が正確にはいつから、どのように存在し始めたかは明らかになっていない。とはいえ、高麗時代の王である肅宗の在位期間中であった1105年に男女が裸で漁業を行うことを禁じた法令があったことから、すくなくとも高麗時代には海女が存在していたとみられている（강대원 1973）。

海女は朝鮮時代においては^{ヤンバン}両班など士大夫らが残した記録に残されており、「哀れで惨めな存在」¹³として描かれていた。それらの記録の中で海女は、顔は黒くやつれた様子で過重な労働を強いられる存在として描写された。当時は白い肌が羨望されていたので、これらはあまり肯定的な描写とは考えにくい。しかも、鮑を採ることは非常に難しかったのにもかかわらず、官僚の命令に従うため、鮑を大量に捕獲しなければならず、苦しい生活を送っていたとされる。

これについて、アン（안미정 2008:56）は中世の貢納生産方式の中で海女の仕事は、女性にとって漁労の特性上肌を露出するようになったことにより、下層民の労働という認識とともに、更に卑賤な存在になっていると指摘している。またアンは、女性にこのような労働が強化されたのは、海女らが家父長的儒教主義文化の中にいたがゆえであるとも考えている。

また、海女自身が海女業をどのように考えていたかをうかがえる他の資料として、海女の労働歌である「海女ノ・ジョンヌン・ソリ（해녀 노 짓는 소리）」を挙げることができる。海女の歌は海女たちが海に出る際、船の「ノ（槽）」を「ジョンヌン（漕ぐ）」「ソリ（歌）」で、韓国では唯一済州島にだけ具体的な歌詞が伝わっている。海女の歌は共同の労働の中で生じ、口伝され、共有されてきたため、済州島のどこの地域でも、海女の歌は同一な旋律と共通する歌詞を共有する（좌혜경 2006:139-140）。

ゆえに、その歌詞には彼女たちの考え方も反映されていると考えられる。労働に対する認識は「労働の中でおそらく一番卑しい労働であり、死ねないからやること」（유철인 1999）とする。ザ（좌혜경 2006）は海女の歌はムルジルを単に「死ねないからやる」ものと認識する労働文学としてだけでなく、済州女性の強さや海女の歌は苦難を克服するための力を持つ歌であるとの主張を紹介している。仕事に事故で死亡する場合もあったので、彼女たちは歌の歌詞でムルジルを、「魂魄箱」^{ホンベックサンザ}、「七星板」^{칠송반}¹⁴を背負って、そして「あの世を行ったり来たり」と表現した。これは、ムルジルが常に死の危機と繋がっていると認識していることを意味している。

また、海女の歌に頻出する単語は「あの世（저 세상）」や「あの世へ行く道」など、「死」と関連するものが多い。まさに、命をかけてする仕事であるため、作業に行く道は恐ろしく行きたくない所として表現されていた。そこは職場というよりは、「あの世へ行く道」と表現される所である。そこに行くしかない運命とされるのならば、彼女たちの意識は前向きで強いというよりは、断念が含まれており、より従順だと言える（한창훈 1999:91-92）。

また、「三度の食事を抜かして、このムルジルをし、こつこつ貯めた金銭が、全部浮浪者¹⁵の杯に入る」という歌詞からは、たくさん苦労して稼いだお金を夫が酒代として使ってしまうという、彼女たちの労働の代価が自分自身のためではなく他人のため使われてしまうとの認識をうかがえる。

3 産業化の中の海女：日本植民地時代から 1970 年代まで

(1) 日本植民地期

日本植民地期には日本の水産物商人の登場により、海産物の価格が大きく上昇した。その結果、自給経済の形に留まっていた海女業は、商品経済へ転換された。収入の増加により、経済的に占める割合も高くなった。また、それまで裸眼で作業していた海女たちに水中眼鏡が導入された¹⁶。高野（1996）によると、従来まで2～3mだった視界は20mまで広くなり、目の疲れも減少して漁獲量も増して、20世紀初には陽村（内陸農村）だった済州経済の重心が海村（沿岸漁村）へ移動した。その結果、社会的位置もかつては露出の多い姿で作業する素潜りのために海村は低く陽村は高かったものが逆転した。海女は1900年代初めからは積極的に出稼ぎ労働¹⁷にも出るなど、根気のよい一家の大黒柱としての役割を果たした。日本の資本主義が浸透するなかで、海女も資本家に対して賃金労働者の職業集団として変貌するようになった（권기숙 1996）。日本の先進的漁業技術を用いた日本漁民は済州に進出し、漁業を行った。結果的に日本漁民の済州進出は水産資源の枯渇につながり、海女は打撃を受けることになった。そのため、海女は済州の外へ出稼ぎするようになったのである。特に1932年頃には海女の出稼ぎが最も盛んで、当時の済州海女組合員数8862人の57%に当たる5078人（日本1600人、韓国3478人¹⁸）が出稼ぎに出た。日本植民地期、海女の出稼ぎ労働は一般的な慣行として定着するようになった。

ジョン（정수철 1990）によると、1938年頃に20万人だった済州島人口のうち4分の1にあたる5万人が日本へ渡った。日本へ行った5万人の中、海女を含めた女性は1,500人ほどであった。つまり、4万8千人以上の男性が日本へ渡ったことになるが、そのため、済州に残っていた女性たちの労働の重要度は大きく増加したと推定できる。また、1916年度には増加した採取物の共同販売のための海女漁業組合も結成されるようになった。さて、王朝期には過重な労役で苦しんでいた「可哀想な女性」だった海女は、この時期にはどのような視線で見られていたのだろうか。このことを、当時の新聞記事を引用しながら概観してみる。

1920年4月22日付、『東亜日報』3面には「可憐な海女の運命」という見出しの記事²⁰がある。

海女が活動で生産する金額が一年に数百万ウォンに達する。しかし、このように毎年海に出て海藻類や魚類を採る女性の数は1万人に達し、毎年4月から9月まで釜山、蔚山などへ出稼ぎする女性の数が4千人以上で…朝鮮産業界の重大な現象である。しかし、海女の生活を詳しく見てみると非常に悲惨なことが数多くある。海女が釜山などに出ると、物商客主²¹という者に依り5～6ヶ月ほど宿を提供してもらい、お金も貸してもらう。だが、いわゆる物商客主らの狡猾な籠絡により、海女たちは半年も親や子共と別れ故郷を離れ遠い海の向こう側まで来て暑い日差しに日焼けしながらも労働をするが、故郷に帰るときは借金をしてしまう悲惨な運命である。

表1 出稼ぎ海女の数と進出地域（1937年）¹⁹

単位：人

韓国	全羅南道	全羅北道	慶尚南道	慶尚北道	忠清南道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	黄海道	合計
	493	18	1869	473	110	54	32	5	50	2301
日本	対馬	高知	鹿児島	東京	長崎	静岡	千葉	愛媛	徳島	合計
	750	190	55	215	65	295	51	19	50	1891

まず、注目したい所は見出しの「可憐」という単語である。韓国語での「可憐」は可哀想で哀れであるとの意味を持つ。海女が採取する海産物に価格がつき、所得を得るようになってからも、海女は依然として「可憐」な存在である。海女は相変わらず搾取され苦勞する女性としてのイメージを持つ。搾取する主体が朝鮮王朝から物商客主や帝国日本に変わっただけである。

1934年9月4日、同じく『東亜日報』の3面には「多島海巡航（八）²²磯辺の人魚海女作業風景」という記事で海女を次のように描写する。

数十人の海女がおり、海底まで見えるような水の中で活泳する海女がいて、水際には半裸を出したまま呼吸する海女の口から鳥の鳴き声のようなメロディーが流れてくる。

そこには老婆も、清純な処女も、發育期の少女も皆いる。我々が画像から見る磯辺の人魚のように彼女らの天地は陸地にだけじゃなく、海の中にもあるのである。

赤銅色の肉体がぐいっと發育された筋肉が太陽線と一緒に私の目に反射する。

…このように、私は美しい海女の姿をスケッチすることができた。

この記事には図1の挿画が添えられている。図の海女は胸を出したまま、岩のような所に座っている。彼女たちが息切れて苦しく吐き出すスンビソリ（숨비소리²⁴）は「鳥の鳴き声」に表現され、「磯辺の人魚」や「赤銅色の肉体がぐいっと發育された筋肉」などの表現は海女の具体的な生き方を描写したというよりは、不思議な異国の見せ物的な存在として扱われている。また、1934年1月3日付東亜日報の7面「海女生活記—蒼海へ身を投げ人魚のように潜水」という記事には、次のような記述が見られる。

並外れた生活を送っている海女たち…海に出て、丸裸で局部だけ隠したまま、男たちとはばかりなく働きながらも、初面だからか声をかけたら最後まで恥ずかしがりながら会話をためらう…陸地の女性が化粧や着こなしなどでおしゃれをすることと正反対で彼女らはクリームも人絹もしらない。ただ、一番深く潜ることを自慢に思い、それによって異性から愛されるという…一日中労働で疲れた彼女らは、休むこともできず、家庭では主婦として家事をしなければならない。それに加えて、採取した物を頭に載せ市場で売る…何十回も海の中に入り採取した物を船に載せ帰宅する際「イヨッサイヨッサ、こんなに稼いで田んぼ買うか、もったいない青春だけが海の中で老いている」と



図1²³

いう歌を歌う。海で採取したものの入漁権を持つ地元民と半分ずつ分け、また、そこから組合税、船代、火木代を除くと自分の分はいく文にならないというので、いかほど可哀想なことか。

陸地の女性がおしゃれに気を使うのに対して、海女たちはクリームも塗らず、人絹も着ていない。局部だけをギリギリ隠して日焼け顔でひたすら潜る海女は、ここでは陸地の女性とはかけ離れた存在とされている。それは、記事の冒頭に海女について「並外れた生活を送っている海女²⁵」と記していることから分かるように海女たちの生活様式は普通ではなく、異常なものであり、おしゃれもできず、休みも取れない上、ちゃんとした報酬も受け取れない「可哀想」な存在とされている。

これは、朝鮮時代とあまり変わらない視線である。海女業は良い所得源になり、男性が少なくなった²⁶済州島の経済を支える役割を果たしたが、そのような成果が評価されるどころか、海女は相変わらず「可哀想な存在」として留まっていた。

日本植民地時代を経て、海女業は賃金労働として位置づけられ、多少の変化はあったと考えられるが、2000年代に入り、海女の再評価が積極的に行われる前までは、海女の仕事は他人に自慢できる仕事ではなかった。それは、女性として「醜い」姿で行う「卑賤な」仕事である同時に、常に死の恐怖と戦いながら厳しい職場で行う作業だったためであると考ええる。

(2) 終戦後から70年代まで

朝鮮戦争の後には、出稼ぎに出た海女たちが帰郷し、海女たちの数が過去最大に多くなった時期である。50から60年代には、済州道開発政策により観光産業²⁷が盛んになった。済州道の観光産業は海女の漁労活動を異国の風物詩として紹介してきた。

彼女たちの日常の文化が商品化される過程の中で、海女は勤勉な済州女性の象徴として浮き彫りになった。そして多様な観光商品で彼女らを対象化したイメージが再現されてきた(안미정 1998)。

しかし、表2でも確認できるように、1970年から1980年の10年間にかけて、1970年に1万4千人だった海女数は1980年には、ほぼ半分近く減少して7,804人になった。この10年間の急激な減少の背景として換金作物の栽培や女性の教育機会の拡大、第3次産業への就業などが指摘される(원학희 1985; 조혜정 1988; 권귀숙 1996; 안미정 2008)。また、これと同時に女性の高学歴化や大衆メディアの影響、

表2 年度別潜水漁業人²⁸

単位: 人

年度	人数
1965	23,081
1970	14,143
1975	8,402
1980	7,804
1985	7,649
1990	6,827
2000	5,789
2005	5,545
2010	4,995
2014	4,415

表3 済州島の年度別柑橘生産量²⁹⁾面積: ha
生産量: MT

年度	栽培面積	農家数	生産量
1953	16.8	—	6.3
1963	101.8	41	509
1968	1,645.1	442	3,549
1973	8,409	5,686	26,231
1983	16,975	23,182	345,900
1993	21,479	26,571	619,000

都市への往来など生活環境の変化も大きく作用されたと見る見解もある（조혜정 1982: 95）。

(2-1) 換金作物の栽培や観光産業への移転

海女の仕事は、厳しい労働だったため、海女業以外の選択肢ができてからは他の仕事へ兼業或は転業する事例が増えたのである。

表3からも分かるように1968年のみかん栽培の面積は統計の作成が始まった1953年のおよそ1百倍も増大している。これは、1968年に農業民所得増大特別支援事業が施行された影響であり、70年代のセマウル運動などを経て済州の柑橘類栽培は急増するようになる。柑橘類以外にも、サツマイモ、菜の花などが当時栽培され始めた代表的な換金作物である。これらの作物は、利益が高かったため、海女たちは、身体的な作業負担の大きい海女業にこだわるよりは、よりお金を儲けることができる方向への兼業或は転業を自然と選ぶようになった。これは、表2に見るように、海女の数が急激に減少した原因の一つとして指摘³⁰⁾されている。

また、この時期に済州を縦に貫通する横断道路が開通したことも海女の数が増えることに大きな影響を与えた可能性の一つとして考えられる。漢拏山を貫通し済州と西歸浦を繋ぐ地方道1131号線（通称5.16道路）の開通により、空港のある済州と漢拏山の南側の西歸浦間の移動時間が従前の4～5時間から1時間に短縮され、地域開発や観光発展が転機を迎えたためである。道路の開通と同年、済州と大阪を繋ぐ航路もできて、済州の観光も急激な発展期を迎えるようになる。このように、観光業が盛んになったことも海女の観光業への転業につながり、自然にその数の減少にも影響を与えたと見られる。

(2-2) 「労働の女神」としての海女

1956年頃制作された済州島の初のガイドブックでは海女を済州を代表する象徴的な存在として挙げている。このように、海女を済州の「象徴」として最初に位置付けた韓国人学者であるウ（우낙기）による地理学研究の『済州島』（1965:13）では次のように書いている。

海女は耽羅済州の象徴である。

広々した大海の中で命をかけて戦う彼らの

生々しい姿が漢拏山^{ハルラサン}の娘たちなのである。

海女は耽羅³¹⁾済州の勤労の女神である。

そして、海女の資料を集め海女研究の嚆矢で知られるカン（강대원）の『海女研究』（1973）では序文で次のように述べている。

済州島民の勤勉さと自立精神は高く評価されているが、
それは済州チャムス³²の涙ぐましい勤労精神に基づいていて
これは、済州島民の自立精神の表象として昇華されている。

上述した二つの事例では、海女を「耽羅済州の象徴」だとか「漢拏山^{ハルサン}の娘たち」、「勤労の女神」「済州島民の自立精神の表象」などと表現している。海女は畑仕事や家事に加えてムルジルまで行うほど、労働量が多い。それを黙々と行うことから、済州の海女は勤勉でまじめな女性という言説が成り立った。これは、当時韓国の社会像と深い関係を持つ。1962年から始まった経済開発5カ年計画や1970年から始まったセマウル運動は全国民が一丸となって、経済発展のために勤勉に働くように促される時期であった。当然のことながら、済州海女の働きぶりは、まさに当時の韓国社会が求めていた理想の姿であった。

また、韓国で政府の主導で1970年からセマウル運動という汎国民的地域社会開発運動が始まる。セマウル運動の真最中だった1972年の南済州郡³³の定期刊行物の記事³⁴には次のように述べられている。

我々は個々人の海女の労功に感謝し、理解して肯定してあげることがいつもよりも強調される。特に男性でもない女性として、深い海の中で危険を怖れず、作業しているのだ。
彼女たちの主張をいつの時代でもどこでも、正しくそして速やかに受け入れて、産業の担い手として充実に奉仕できるようにしなければならない。

（中略）

また、贅沢と浪費の中から祖国の繁栄は期待できない。1月の寒い冬の日にも海のなかに飛び込んで操業する海女の精神のなかに祖国があり、そのストイックな生活の中に繁栄があることを全国民は深く知り、これを見習っていくべきである。

（中略）

海女たちから得られる相当量の漁獲高は本道の経済的な一面を支えている。

済州の海女の中の勤勉さや自立への挑戦と海女たちの涙ぐましい労働精神の純粹さの中に彼女たちは、たゆまなく、粘り強い生活の中で今日一日を生活しているのである。

ここからみると、海女は「産業の担い手」であり、女性の体で厳しい環境も怖れず働きながら、浪費や贅沢とも距離の遠い、セマウル運動の望ましい「見本」なのである。アン（안미정 1998）によると、海女の勤勉で強いイメージを観光客に与えようとした理由は、行政が、健気に働く済州海女を、全ての韓国女性のロールモデルにしようとしたからである。

（2-3）「南国の娘」としての海女

一方、1950年の金浦出身の作家ホ・ユンソック（허운석）の小説『海女』に登場する二人の海女は原始的で異国的な女性のイメージを帯びている。

崔上士^{サンサ}³⁵は櫂をまわり、
 みかん畑に若い海女一人を連れてきた。
 海女はスカートをもっただけで、
 赤い腕をそのままさらけ出していた。
 海女にしては顔が美しいだけではなく、
 獣が麝香の匂いを帯びているように若い肉の匂いを放つところが更に良かった。³⁶

このような描写に対してキム（召동윤 2002）は、若い女性が11月頃に上着を着てないまま外で歩くことから理解しにくいと指摘した上に、このような装置が、登場人物である海女の原始的で異国的な女性性を強調するための作家の意図であると述べている。キムは他にも韓国文学史で相当な位置を占めている作家たちが済州の海女をテーマに書いた作品を挙げて、彼らが作品の中で海女の実際の生き方よりは、ロマンチックな立場から見つめた異国的なイメージや性的な対象として描写している傾向が強いと指摘した。また、そのイメージは作品に接した読者にも影響を与えた可能性があるともみている。

他にも、当時の新聞記事で済州海女について書いている部分を見ると「済州島海女たちの健康な野性的肉体美は太古の神秘を持ち美しいけれど…」³⁷、「遠く南の海の伝説のように聞こえる海女たちの生態を研究するため、韓・米共同調査団が24日釜山へ派遣された」³⁸、「牧歌的な南海の美しい風景と神秘的な耽羅の伝説で観光客を呼び寄せる」³⁹など、海女に異国的イメージを与えるようなレトリックが使われている。1960年代は出稼ぎに出た海女たちが戻ってきて、済州島に海女が一番多かった時期である。現在最も多い現役海女の年齢層である70代が若かった頃と時期的に重なっている分、この時期からの海女イメージから、現役海女が自分たちの仕事について持つ内部イメージが相当定着されたと考える。

また、この時期に制作された映画『海女』においては、当時海女をどのような視線で見ていたかが窺える。1964年公開された映画『海女』⁴⁰には当時の済州海女をみる外部の視線がよく反映されている。映画のストーリーは、次のようになっている。陸地を憧れる姉妹海女の姉の方が、陸地男性から誘われソウルへ上京する。しかし、彼女はソウルで苦労ばかりして帰郷する。彼女が済州に戻った頃、妹もある男性の誘いで彼と一緒に本土へ行こうとしていた。そこで姉は妹を説得し、陸地に対する夢がどれだけ愚かな虚像なのかを教える。図2のように、映画は「映画はオール現地ロケ」、「水中特殊撮影成功」、「小麦色の肌を持つ娘たちの半裸の曲線美」などという宣伝文句⁴¹を使い広報していた。

映画『海女』のシナリオを分析したキム（召동현 2015）は、主人公の海女が陸地の男性と食事をする場面でフォークやナイフの使用法を知らず困るという場面と、ラジオスイッチの操作法を知らないという場面から、前近代的な海女に対する朝鮮半島本土の優越意識をあらわにしているオリエンタリズムな視線で描かれていると指摘する。また、キムによると映画は始めから最後まで海女が、野蛮で官能的な存在として対象化されている。このような視線について済州島地域内部では、映画が公開されてから有識者を中心に強い反発があったという。この反発は済州道の有識者と映画製作者の間で1964年行われた座談会記録から、具体的な様子を垣間見ることができる。座談会で、済州島の有識者たちは、「勤労の女神」である海女が侮辱されたことに怒りを表出した。キムはここで、海女を想像する外部主体（映画製作者）と内部主体（済州島の有識者）との間の隔たりに注目する。外部主体は海女を野蛮と官能の存在として想像して、内部主体は勤労の女神として海女を発見しようとしていた。当時の観光ブームに便乗しようとした内部主体の試みが失敗で終わったことを確認した内部主体の挫折や怒りを確認で



図2 映画『海女』（1960）の新聞広告⁴²

きると指摘する。また、キムは座談会に現役の海女も参席していたにもかかわらず、一言も喋らず沈黙を続けていた事実を取り上げ、彼女が座談会という「実践の場」でさえ、発言をしなかったことは、済州島の中ですら、海女の立場を代弁する知識人によって表象行為が独占され、海女当事者が排除されたとみている。海女が存在を規定している地域の主体は海女ではなく、海女について語る有識者の男性であると述べている。また、キムはこのような女性話者の沈黙は一定部分強要されたものとし、地域内部で中心一周辺の位階が暴力的に反復されていて、位階の反復がローカリティーの多様性を意図的に排除する結果を招くことになる」と指摘する（キム 2015: 23）。

このようなイメージは、映画だけでなく、海女をテーマにした他の文学作品⁴³からも「野生の処女」と「文明の男子」の出会いというクリシェで多く見られる。

それらの作品が済州の海女をロマンチックに描写しながら、彼女らの具体的な生き方には関心を寄せなかったことは、観客や読者の海女へのイメージ形成にも影響を与えた可能性がある。

4 1980～90年代：海女の神話化と商品化

この時期には、海女が登場する文学は以前までの済州外部出身者によって書かれたものが多かったが、1980～90年代には、済州出身作家による作品⁴³が多く著されるようになった。それによって、従来のように海女をロマンチックなイメージで描くよりは、職業人としての海女の姿が描かれるようになった。済州海女の勤勉さは、1980～90年代にも強調され続けた。特に1992年バルセロナ五輪のマラソンで金メダルを獲得したアスリートであるファン・ヨンゾ（황영조）に関する新聞記事⁴⁵では、彼が海女の息子であることが注目されたところから、そのような雰囲気が窺える。

92年バルセロナ五輪で56年ぶりにマラソン大会を制覇したファン・ヨンゾ（22）の優勝の秘訣として海女である母親イ・マンザ（53）からの譲りものである健康的な心臓が大きな役割を果たしたことが明かされた。

彼の肺活量は一般人の倍以上でることが知られ、その原因を海女である彼の母親から探そうとしたのである。彼の母親は心肺機能が優れていて、その血統から彼も強い心肺能力を持つようになったとの記事は、上述の事例以外の新聞にも多数⁴⁶見られる。また、海女である母親からは身体能力だけでなく、精神力も譲り受けたとの見方もあった。

図3 海女の造形物⁴⁷

クォン（1996）も指摘するように、このようなイメージの固定は済州海女を含めた全ての女性を超過労働へ追い込む談論として作用する可能性があり、様々なチャンネルにより再生産される済州海女の「勤勉の神話」は全ての女性がまじめで強靱な生き方をしなくてはならないとの抑圧的なイデオロギーとして作用する可能性もある（권귀숙 1996: 241）。

また、この時期は済州の観光化が更に活発に進んでいた。1978年済州を訪れた観光客が50万人だったことに對し、5年後の1983年には100万人を突破するほど、済州の産業で観光が占める割合が高くなった。

このような状況の中で、済州海女が観光産業により、商品化された代表的な事例として、アン（안미정 1998）は済州の海女の石像を挙げている。石像は済州のあちこちに設置されているが、実際ゴム服を着てムルジルをする今日の海女とは違い、在来式の作業着であるムルオッを着用している。これはムルオッを着ていた過去の済州海女が本物（authentic）の済州海女であるとの考え方を反映したものである（안미정 1998: 170）。しかし、ムルオッを着てムルジルをする際には、頭巾を着用する必要があったが、石像の海女は被っていないか、髪の毛を垂らしていて、当時の済州海女の姿とはほど遠い。また、アンは石像の姿勢を指摘する。片腕をあげ、空を見上げる姿勢は海から出た女性とは考えにくいと述べている。塩水で濡れた顔をあげ、太陽を見上げる女性はいないとし、海女の姿勢というよりは、専門のモデルが写真を撮る姿勢に近いと述べながら、勤勉に働く女性を姿というよりは、観光客向けの見せ物だと見ている。しかも、石像のモデルは全て若い女性で実在する海女の年齢代とは異なることや、着ている服もムルオッでありながら海女がかつて実際に着ていた作業服というよりは、水着に近いとも指摘する（안미정 1998: 169-171）。

従って、アンはこれらの海女像は済州の海女を「真似」している造形物に過ぎないと主張する。また、これらの海女像は観光商品化の過程の中で実際の海女の姿とはかけ離れていて、こうした異質的なイメージの再現は観光客に見せ物を提供する行為に過ぎず、海女当事者に疎外感と自己卑下の感情をもたらすと述べている。

5 2000年代以降：観光化された海女と「海の母親」

海女についての議論の方向性が大きく変わり始めたのは、2000年代に入りユネスコ無形文化遺産に

済州の海女文化を登載しようとする動きが始まったときや、海女博物館が開館した時点と重なる。この頃を境に海女を見る世間の視線が大きく変わり始めた。これまで「可哀想な卑賤な娘」から「可憐な運命の持ち主」、「勤勞の女神と官能的な娘」「苦難に立ち向かう強い女性」として次々と新しいイメージを塗り替えられてきた海女たちは、この時期からは「海の母親」として位置づけられるようになる。これには、中心的な担い手の年齢との関連も否定できないが、より根本的には済州海女に新しい価値を見つけようとする狙いがあるとみられる。なぜなら、そうすることによって、海女の数が減っている状況のなかで、「海女」という器に済州の伝統文化を入れると世界的な文化商品として済州文化を世界に披露できるという期待」(좌혜경 2011)と、海女の作業方式が「持続可能な開発」という現代的労働価値にも合致するからである。また、女性たちの共同労働の中からは、ルールや海への知識、独特な信仰など今まで見逃されていたところを見直そうとする動きが生まれた。

2002年6月9日～11日まで社団法人世界島学会と済州大学平和研究所の主催で開催された「第1回潜水女学術大会」でユネスコ無形文化遺産として済州の海女文化を登録することが決定されてから、2006年海女博物館の開館は象徴的な節目になった。博物館という救心力ができてから、より組織的、体系的な海女研究が行われるようになり、済州海女に関する史料を集めた資料集『済州海女史料集(제주해녀사료집)』(2009)と2年間にわたり済州の100個の漁村契を訪問調査し海女の儀礼、うた、伝説、マウル魚場運営規約などを調査した報告書『済州海女の生業と文化(제주해녀의 생업과 문화)』(2009)、海女の歌を集めた『済州海女歌集—イヨイヨイヨドサナ(제주해녀노래집이여이여이여도사나)』(2010)、2006年から2010年まで5回にわたって開かれた海女国際学術シンポジウムの資料と2011年の済州特別自治道議会の女性特別委員会の海女討論会発表資料を集めた『済州海女の再照明(제주해녀의 재조명)』(2011)済州海女の服飾を調査した報告書『済州海女服物語(제주해녀옷 이야기)』(2012)、102人の海女の生涯史をまとめた報告書『スンビジルベワン・ノムジュジアニョ(숨비질베왕놈주지아녀)』(2014)など膨大な調査・研究が出版された。

以前より一段と体系的になった海女研究により、一般の注目を集めるようになった海女は、かつての神秘的な存在というよりは、身近な済州の象徴として位置づけられた。また、地元紙の済民日報は2005年6月から海女の企画記事を連載し始めた。第一部が2005年6月27日から始まり、2年間を区切りに現在第6部まで10年以上連載中であり、ユネスコ無形文化遺産の登録のために必要な現地内部の共感の形成と、これからの保存管理方策の方向性を提示してきた。

以前とは確然と異なる海女へのイメージは、海女像からも見出すことができる。図4と図5は、ボパ^{マウル}ン(법환)村の広場に設置されている海女像である。

この広場には、1950年代の服装をした海女像と、現役海女がムルジルの際着るゴム服姿の海女像が隣に並んで立っている。

2000年以降設置されたこれらの海女像は、以前までの海女像と比べ、より現実的な海女の姿を反映している。若いグラビアモデルを連想させるポーズで無邪気に微笑んでいた姿はもはや見られない。彼女たちは、真剣な顔つきで仕事と向き合っているような印象を与えている。また、服装や姿勢、作業道具などもきちんと考証が行き届いている。前述した1960年代の映画『海女』では、立派なプロポーションを持つ若い海女が微笑む写真をポスターに使っていた。また、1990年代の観光記念品に登場する海女のイメージは図6のような実際の海女の年齢とは距離のある官能的なモデルの写写真が使われていた。これらの海女イメージはアン(안미정 1998)が指摘した通り、実際の海女とはかけ離れている。

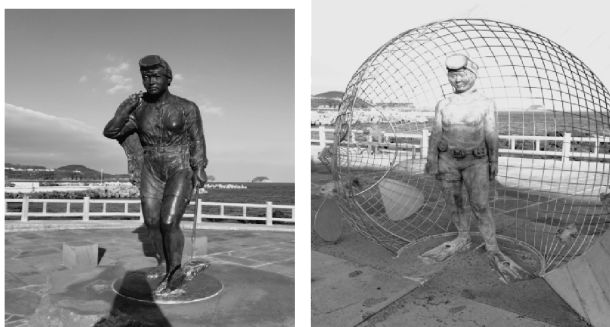
図4, 5 ポパンマウル海女像⁴⁸図6 お土産のお盆⁴⁹

図7 海女の公聴会の資料集表紙

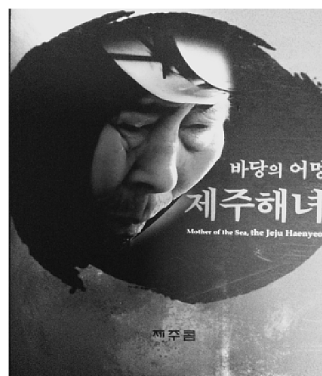


図8 済州博物館図録表紙

2000年代以降、特に2006年以降の海女イメージは中年以上の女性のシワのよった顔がクローズアップされるか、作業服の姿で表現されるものである。このとき、官能的な姿態をアピールする表現は見当たらない。

図7は済州道議会の主催により、国会議員キル・ジョンウ（길정우）氏が2013年12月に行われた「済州海女ユネスコ無形文化遺産登載を目指す公聴会」の資料集表紙で、図8は海女博物館の図録の表紙で



図9 漁村契作業場の壁画⁵⁰

ある。これらは、現在の済州海女に対する最も一般的なイメージを示す写真である。特に図8の表紙には「海の母親」という意味の済州方言が書かれており、下には英語で「マザー・オブ・ザ・シー (Mother of the sea)」と併記されている。このようなイメージは高齢化が進んだ現在の海女業を担う主な年齢層を反映しているのである。

海女の写真以外にも図9のような壁画は済州島のあちらこちらで見かけることができる。これらの壁画は、地域あるいは外部から訪れたアーティストがボランティア活動で描いたものが多い。壁画のテーマは村ごとに異なるが、済州島の風習を描いたものが多く、海女は殆どの壁画に描かれている。これらは、済州観光の人気コースであるオルレキルを歩いている途中に、必ず何回かは見かけることができる。壁画をみた観光客は、描かれていた海女を海女のイメージとして認識する。上記の壁画に描かれた海女はムルオッを着ているが、絵の中から以前のような色気は全く感じられない。

6 ユネスコ無形文化遺産登載—拡散される海女イメージ

ユネスコ無形文化遺産登載への議論が本格的に展開されてからは、済州の行政側と民間側から海女を「文化財」にするための土台づくりや保存のための様々な取り組みが行われた。海女博物館の設立や海女学校、海女祝祭と学術大会の開催、海女のムルジル公演そして海女体験まで、実に多方面でのコンテンツが作られるようになった。中でも海女学校は2007年済州市翰林邑婦徳2里の漁村契が設立したハンスプル海女学校が最初である。2015年にはボパン海女学校が開校して、現在、済州には二つの海女学校が運営されている。ハンスプル海女学校では、海女になりたい者を募集し一定期間海女としての素養と技術を修得させ、職業としてだけではなく、消えてゆく海女文化を理解することで海女文化を継承・発展させていくための教育課程を設置するとしている。ハンスプル海女学校は毎年5月に入学式を行い、8月まで、週末ごとに計17週間授業を実施する。教育内容は5月に安全規則、心肺蘇生法、装備使用法、水泳訓練、海女歌教育を習う。6月には泳法、呼吸法、潜水法、海産物採取、海女文化教育などを学習し、7月に海女文化教育と海産物採取訓練を行う。8月に海産物採取訓練と総合訓練を行い、それまでの成果を評価する時間を設けている。

人気俳優の主演で話題を集めた2015年放送されたドラマ『メンドロントトッ (멘도롱또띠)』⁵¹は済州島を背景に海女学校が登場し、主人公女優の海女服姿が注目を集めた。ドラマが終わってから、撮影地だったカフェは人気の観光地になり、長蛇の行列ができるほど人気である。このドラマ放送以降、実

際に海女学校に対する関心が高まり、インタビューしたハンスブル海女学校の実務担当者によると、問い合わせの電話やメールが2~3倍は増えたという。無論、海女学校を卒業しても海女になるとは限らない。漁村契加入のためにかかるお金や既存の海女全員の承認も要する長い道のりである。しかし、海女学校は職業海女を養成するという目標以外にも、海女という職業についての知識を伝えるところであるという意義を持つ。これは、「済州だけの独特な海女文化を保存し、済州海女の生き方の知恵と強靱な開拓精神を若い世帯へ継承・発展させるため海女学校を設立した」とするハンスブル海女学校の設立趣旨からも窺える。また、ボパン海女学校でも80時間の教育課程の中で、海女の歴史や文化遺産の理論などの授業に9時間、文化体験と名付けた遺跡訪問などに6時間を割り当てている。

筆者がインタビュー⁵²を実施した30代の海女Aさんは、大学を出てソウルで就職をしてから結婚と出産を機に仕事を辞めて済州に戻った。「専門大学まで出て、ソウルで就職までしたのに何で済州に戻って海女になろうとするのかと海女である母に一番多く反対された」とはいえ、彼女は済州出身で母親が海女だったので他の人よりは「割と楽」に海女になることができた。その後、彼女は海女学校を通い、卒業した。すでに海女としてムルジルをしていたのに、なぜ海女学校に通ったのかについて、Aさんは、「私は今のこの仕事が心から好きで、もっと多くの方々がこの仕事についてちゃんと分かってほしい。結構、偏見が多いからね。私は海女としては若い方だし、それが珍しいから放送局や新聞などでインタビュー要請がくる。最初は深く考えず応じていた。でもやっぱり、質問に答えていく中で、私自身が海女についてよく分かっていないことに気付いたの。だから、私も自分の仕事についてちゃんと知りたいし、しっかり海女のことを伝えていきたいから学校に通うことにした。卒業後も海女の歴史や理論的なことなどについて勉強もしている」と答えた。無論、海女学校を卒業しても実際に海女になるためには、漁村契加入など乗り越えるべきものが多いという点から、海女のような職業を、学校というシステムを通じて「養成」できるのかについては未だに課題点が多い。しかし、学校の「卒業生」は以前まで全く知らなかった海女の世界に触れて、自ら経験して知識を積んでいく。その中で海女は昔のような神秘的な見せ物ではなくなる。また、学校の「先生」は現役の海女であり、「語り部」にもなっているのである。そして「卒業生」たちが新たな「語り部」として加わると期待もできる。

一方、純粋に観光のため済州を訪れた人も、昔のように「遠くから見て想像する」だけの海女ではなく、実際に海女の作業服を着て道具を持ち海女と一緒に、短時間の「体験」をできるようになっている。ハンスブルやボパン海女学校などに予め予約してから体験場所を訪問すると現役の海女がその日のインストラクターになってくれる。実際に海女が着るゴム服と装備をつけて村の漁場の限定されたエリアで1~2時間素潜りの体験をする。体験場所にはサザエなどが予め海の中に置いてあって、採ったサザエは村の海女食堂にて実費で調理してくれるので、その場で味わうこともできる。⁵³こうした海女体験はハンスブル海女学校以外にも済州のいくつかの場所で行えるようになっている。観光客は海女体験を通じて、どれだけ重い錘をつけて何分ぐらい息を止め、どんな風に作業をするのかを垣間見ることができる。

また、海女のムルジル姿を近くで見ることができる公演も行っている。アクアリウムでムルジル公演を行っていた引退海女Bさんは筆者とのインタビューで「観光客がムルジルを見て我々が水压に耐える姿に驚いて、拍手を送り称賛してくれるからやりがいを感じる。引退してからもお小遣いも稼げるし海女について分かってもらえるから意味もある。こんな公演ができて本当に大満足」⁵⁴だとした。

このように実際に海女と触れ合い、あるいは間接的に体験すること以外にも、済州に移住した若い芸



図10 カフェの飾り物



図11 済州海女モビール



図12 海女のキャラクターショップ⁵⁵

術家やデザイナーたちは海女を素材にしたキャラクター商品をたくさん作り、良い反応を受けている。これらの商品は昔の海女のイメージだった官能的な南国の少女又は労働の女神そして済州の母親像とは異なる多様なイメージを示している。可愛く身近なキャラクターとして変貌した海女はモビールやキーリングなどで済州を代表するイメージとして積極的に消費されている。これは1980年代の記念品に描かれていた官能的なイメージとは真逆のイメージである。

他にも海女祝祭や学術大会など海女が自分の声や仕事を発信するためのチャンネルが2000年以前に比べて端然多くなった。これらは「海女文化」をユネスコ無形文化遺産代表目録にあげるための一環として始まったのかもしれないが、結果的に当事者の声が少しずつ聞こえるようになり、固定化された海女イメージから様々な形で多様化していくようになったという肯定的な側面をもたらした。

終わりに

女性が素潜りで海産物を採取する職業である海女は済州の歴史と共に現在まで続けられている。先端技術が発達した現代社会のなかで、「文明の利器」を使わず、原始的形態の作業を行っていて、共同体を持ち、そこから文化を作り出した。女性の体で海に入り険しい仕事を行ってきた海女に対するイメージは時代によって塗り替えられてきた。

朝鮮王朝時代には、労役を担当していた海女の露出の多い服装や過重な労働量から両班たちから哀れみを帯びた視線で見られた。日本植民地時代には、資本主義の導入により採取物を以て家計を担う存在

になり始めたにもかかわらず、出稼ぎムルジルや斡旋商人らの横暴に苦しむ可哀想な存在、そして異国情緒を投影する存在として見られる。独立後、国家は経済発展を国の目標として掲げ、輸出品のサザエなどを採取する海女の勤勉さが強調され、婦人のロールモデルとして紹介される一方、本土出身の小説家や映画製作者により野蛮性と異国情緒にフォーカスを合わせた作品が多数作られた。これらの作品において海女は他者化され、済州島はオリエンタリズム的な視線で見られた。その後、1980年代以降になると、海女の数減り高齢化が進み始め、海女の神話化と観光産業発展による商品化を経て、2000年半ばからは、ユネスコ無形文化遺産登載への議論と共に、海女は改めて生態の守護者・海の母親として位置づけられるようになった。

海女はいつの時代でも、男性主義的な視線から逃れることはできなかった。そのような視線は、彼女らの海についての知識や集団活動による秩序や厳しいルール、お互いを助けあう精神などよりは、無知で純粋な、露出の多い服を着て作業をする神秘的なイメージを主に消費しようとした。その結果として作られた外部のイメージ再生産が、海女たちの仕事に対するプライドの低下とつながり、柑橘類などの換金作物の栽培や女性の教育機会拡大などの要因と合わせて結果的に海女の仕事を選択しない原因になったと考える。

済州道から刊行した海女の生涯史調査報告書を見ると、「ムルジルをやってきたことを自慢に思うし、ムルジルを通じてお金も稼いで色んな所も行けたので海女になったことを後悔したことはない」（제주특별자치도 2014: 25）という海女や「生まれ変わってもムルジル以外の仕事はしたくない」（제주특별자치도 2014: 61）と言う海女もいる。しかし海女たちは、自らが後悔しないからといって決して自分の娘にそれをさせようとするわけではない。実際に筆者がインタビューした60代から70代の海女たちは、「私なんかをインタビューして何するの?」「この仕事を今は自慢に思うけど…昔は他に選択がなかったため選んだわけで」「この仕事でうちの子たちを大学に行かせて、お家も買ったから自慢に思っているよ。でも、娘にはさせたくないね」などと答えた。これらのインタビューの中で共通しているのは「海女は否定的に見られる傾向が強い」或いは「強かった」ことと「私はやったけど、娘にはさせない」というところであった。今までやってきたし、それなりに満足すると言うことと、自分たちの子孫にそれを継承させて行きたいと思うことには、かなりの差がある。

海女を下品なものとする外部イメージの内面化により、海女は自らを卑賤で厳しいとみる認識が定着する一方、彼女らの勤勉さに対する神話化も同時に行われた。「哀れで卑賤な女」から、「勤勉な労働の女神」、「エキゾチックな南国の娘」まで、外部からの視線で裁断されフレームの中に閉じ込められた海女は、自ら卑賤な仕事をしているという認識と神話化による過重労働を強いられる環境の中に置かれた。その結果、海女の娘世代は海女以外の仕事を選ぶようになり、後継者不在のまま、現役世代の高齢化が進む状況になった。

済州の行政側がユネスコ無形文化遺産登載という目標を達成して、海女文化への関心を呼び寄せるための取り組みや運動が続いているなかで、海女のイメージは、それまでの官能的な女性や過重労働に苦しむ哀れな女性、勤勉な労働の女神のいずれも消えていき、新しいイメージを獲得した。

「海の母親」として、ユネスコ無形文化遺産登載向きの取り組みの中で再評価・再発見された海女に対するイメージの変化により実際に海女を目指す若者が海女学校にも入学を希望する場合も増えている。海女はまた、ドキュメンタリーや映画、ドラマなどのチャンネルを通じて肯定的なイメージ獲得した。海女体験の中で、そして海女食堂での触れ合いの中で、壁画やカフェの飾り物、モビールなどから見

られる可愛くて健康的な海女像が創られているのである。そこに、済州歴史の一部を担ってきた「済州の母親像」が加わっている。

筆者がインタビューを実施した70代の海女⁵⁶は「ユネスコとかなんとか難しいことはよく分からない。でも海外の偉い方々から私たちを認めてくれるのでしょうか？ ユネスコあれやるとしてから支援や補助も多くなったし、以前より海女という職業にもっと自負心を持つようになったわ。まあ、いいじゃない」と答えていた。これは外部からのイメージが海女たちに確実な影響を与えている証明になる。

ここまで、済州島における海女のイメージ変遷を通時的にみて、海女の存続危機をもたらした可能性の一つとして考えようとした。しかし、「ユネスコ」以降の海女イメージが後継者育成や生業としての海女の存続にどのような影響を与えているかについての具体的で詳しい考察までは至らなかった。この点に関しては、今後の課題としたい。

【付記】

本稿は筆者の修士学位論文「海女文化の継承可能性に関する考察—韓国済州島の事例から」（慶應大学大学院社会学研究科）の一部を基にして加筆修正を施したものである。

注

- 1 韓国における、海女を指す言葉は大きく3つある。①チャムス（잠수・潜嫂）②ザムニョ（잠녀・潜女）③ヘニョ（해녀・海女）がそれである。これらを使い分ける明確な基準はなく、済州ではこれら三つの用語が場合によって混用されていた。しかし、2015年10月8日、済州道はこれらの用語を「海女」に統一すると発表した。また、ユネスコ人類無形遺産の登録名も「済州海女文化（제주해녀문화・Culture of Jeju Haenyeo）」となっているため、本稿では「海女」という用語を用いて議論を展開する。
- 2 海女博物館の開館や2007年から年に一回開催されている海女祝祭などが主な成果として挙げられる。（尹2015）
- 3 産業構造の変化による観光業など第3次産業への離職・換金作物栽培の兼業または転業、女性の高学歴化による海女業忌避などが指摘されている。원학희 (1985), 김영돈 외 (1986), 조혜정 (1988), 권귀숙 (1996)。
- 4 KBS TV『다큐멘터리 3일』 2011年4月10日・2015年10月25日, 함주현『그림그리는 해녀 (The stories of Haenyeo)』2014, 고희영『물숨 (Breathing Underwater)』2016などが代表的である。
- 5 チョ（2002: 207）から日本語訳参照。
- 6 朝鮮時代の儒教思想は性理学によるもので、김 (김미영 2004) によると、性理学が支配的概念として位置付けられた16世紀半ば頃から貞節への崇拜が現れた。そのため、「女徳」を国家的に奨励することになった…特に女性に「一夫従事」と貞節イデオロギーが加わり女性のセクシュアリティは家族の範囲に厳しく制限され徹底的に統制された。また、貞節を喪失した場合、社会構成員としての資格まで喪失する事になった（김미영 2004: 4）。
- 7 2015年10月2日に行われた済州海女文化国際学術大会講演の発表文である『제주 해녀의 노동, 일, 그리고 삶: 젠더, 식민주의, 그리고 생태주의』による区分。
- 8 1701年から1712年まで済州島で流刑を受けた文人である김・춘테크（金尊택）が書いた『北軒居士集』（1710）には、김が海女と会話をした記録が収められている。「有所謂潛女者業潛水採蠶或採鰻然採鰻比採蠶甚難而苦有過之其容驚悴有憂困求死之狀余爲勞之仍問其事之詳…其賤而可鄙無以異於吾惟塗朱粉被錦綺異而以寵之故吾之鰻常爲其所聚以言之從故尤微督不已必其多聚而滿」となっていて、海女自身が外部から付与されたイメージを内面化して、自分のことを「卑賤で卑しい」と認識していたことが分かる。
- 9 海に素潜りし鮑やサザエ、海藻類などの海産物を採取する海女の作業を指す。
- 10 2006年済州航空が初めて金浦から済州路線に就航。LCCの就航とともに2007年から約5年間行われた済州空港リニューアル工事により、2003年1千万人だった年間利用客が2013年には2千万人を突破した。現在国内線に

就航中の航空会社は8社であり、大韓航空やアジアナ航空を除いた6社はLCC航空会社である。

- 11 済州の方言で狭い路地を指す言葉で、社団法人済州オルレで管理している。言論人であった서명숙氏がスペインのサンティアゴ巡礼道からモチーフを得て開発した。2007年9月に第1コースが開発されて以来、2012年11月まで全21のコース(約420Km)が作られた。第1から第21まで歩いたら海岸線を沿って済州島全体を一周できるようになっている。各コースは15Km前後で平均所要時間が5時間前後。2007年から2017年まで、720万人(社団法人済州オルレの推定値)がオルレキルを歩いた。
- 12 水産業協働組合法に基づき、各水産業協働組合の組合員を契員として行政区域および経済権を中心に設立された漁業員の組織。契とは韓国に以前から存在していた協働団体。起源は定かではない。農民の必要によって生じて維持された集団であり、契員の相互・親交・統合・共同の利益などを目的に一定の規約を作り、それに従って運営されている(韓国学中央研究院『韓国民族文化大百科』(電子版)「漁村契」・「契」から参照)。
- 13 李健『済州風土記』(1629)、申光洙『石北集』(1765)、魏伯珪『存齋全書』(1791)などでこのような認識が見られる。詳しい内容については尹(2015: 38-44)を参照。
- 14 チルソンパン(칠성판)は入棺の前に死者の遺体を載せる板である。北斗七星のように七つの穴をあけた。七星板の七つ星は北斗七星を意味するもので、中国の道教の七星信仰から由来したものである。つまり、七星板を背負うことは死を意味する。
- 15 文脈上、夫を指す。
- 16 ヌン(눈)と呼ばれる水中眼鏡がいつ導入されたか確実な時期は明かされていない。ただし、ライフヒストリーなどの記録で海女たちが「幼い頃はヌンを使わず仕事をした」と言っている内容から、1900年代以降に済州に導入されたと推測されている(강대원 1973)。
- 17 キム(김영돈 1994)によると、1934年度の記録から出稼ぎ海女の数が1年間で約5000人に達した。彼女たちは、朝鮮半島沿岸部はもちろん、日本、中国、沿海州まで進出した。当時、済州島司で初代海女組合長だった江口保孝は1892年を、同じ時代に済州島を研究した学者、榎田一二は1895年を、それぞれ最初の出稼ぎの時期と述べている。
- 18 海女博物館の分類名称に従っている。
- 19 海女博物館の資料<http://www.haenyeo.go.kr/contents/index.php?&mid=0701> (2017年11月28日取得) から転載。
- 20 記事の翻訳は筆者による。
- 21 商人から物を委託され、代わりに売買を行う、斡旋商人のことを指す。
- 22 シリーズ連載記事だったため、八番目の記事であることを指す番号が振ってある。
- 23 「다도해순항 (八)磯辺의人魚海女作業風景」『東亜日報』1934年8月28日付3面から取得。
- 24 海女は水深5メートルで30秒ほど作業して水面にのぼるが、時には水深20メートルまで潜り2分以上息を我慢する場合もある。このとき、水面に上がる際「ホオーイ (호오이)」という独特な音が出る。この過呼吸状態を済州の方言で스نب소리 (숨비소리) という。日本の磯笛に当たる。
- 25 남다른 생활을 하고있는 해녀 (해녀) 들。
- 26 出漁のため死亡する事例が多かったことに加え、過重な労役を免れようと済州を離れる人が多くなり人口が急減すると、1629年から約250年間「出離禁止令」が出されるようになる。特に済州の女性が本土に行くことは厳しく禁じられた。1850年出離禁止令が解除されるまで、公式的に済州から本土へ渡った女性は一人だったという。
- 27 1959年、済州島観光開発三ヶ年計画が策定された。
- 28 韓国海洋水産府の水産業実態調査(2015)を元に作成。
- 29 제주도(1996)の統計を参考に作成。
- 30 ウォン(원학희 1985)、キム(김영돈 외 1986)、チョ(조혜정 1982, 1988)、ハン・キム(한림화・김수남 1887)、クォン(권귀숙 1996)。
- 31 済州の旧地名。
- 32 海女を指す。注1参照。
- 33 済州島の南側に2006年6月まで存続した行政区画。同年7月から西帰浦市として統合された。
- 34 김성철 「제주해녀: 생활고발」『남제주』18 (72.1) 남제주군 86-88。
- 35 軍隊階級の一つ。日本の一曹に当たる。

- 36 허윤석 『해녀』 1950 「문예」 1950년 2월호 p. 24 翻訳は筆者によるもの。
- 37 京郷新聞「美容の基礎知識」 1959年2月8日付, 4。
- 38 東亜日報「海女たちの生理研究実験を韓・米共同で釜山にて」 1961年8月27日付。
- 39 京郷新聞「海女と蜜柑とサザエの誘惑」 1963年3月12日付5。
- 40 現在シナリオだけ存在し, フィルムは残っていない。
- 41 当時の新聞広告に使われた文章を筆者が翻訳。
- 42 京郷新聞 1964年7月13日付5面と同年7月21日4面の紙面広告。
- 43 김·ジョン한 (김정한) 『月光恨 (월광한)』, 호·윤소크 (허윤석) 『海女 (해녀)』, ファン·スンウォン (황순원) 『비바리 (비바리)』 などがある。
- 44 具体的な作家の名前は오성찬, 현기영, 현길언, 고시흥, 오경훈, 한담화などである。
- 45 京郷新聞「出生からの母親譲りマラソン神話」 1992年8月12日付, 23。
- 46 毎日経済「肺活量優れた海女の息子白浜走った闘魂」 1992年8月10日付, 23。
- 47 2015年筆者撮影。
- 48 2015年筆者撮影。海女像が建てられたのは2005年である。西歸浦に位置するボパン (법환) は2003年, 韓国文化観光部の事業の一環で「濟州海女村 (제주해녀마을)」として造成された所である。国費から予算が下りるプロジェクトで優秀な評価を受け2005年から2008年まで「文化歴史村整備」事業を行った (海女博物館 2009: 469参照)。
- 49 안미정 (1998:174) より転載。論文が書かれた1990年代のもの。
- 50 2015年筆者撮影。
- 51 ドラマの題名の『메드론토트』についてドラマ制作側は, 濟州の方言で「ちょうど気持ち良くなるほどの暖かさ」という意味だと説明したが, 韓国国立国語院によると, 制作側が説明している「気持ち良くなるほどの暖かさ」というよりは, 食べ物を食べるときぬるくなった状態を指す。
- 52 インタビューは2015年9月, 濟州道西歸浦市Sムラのカフェで筆者とAさんの1対1で行われた。
- 53 筆者の体験による。筆者の場合, ボパンの海女体験場を利用した。
- 54 2014年8月, 濟州道西歸浦市S村の海女控え室で筆者とBさん, Bさんの仲間海女1対2で行われた。
- 55 濟州市イ·ジュンソップ街 (이중섭거리) に位置する。
- 56 2015年9月, S市O村の海女の自宅にて1対1で行われた。

参考文献

- 안미정, 1998, 「제주해녀에 대한 이미지와 사회적 정체성」 『제주도연구』 제15집, 제주대학교대학원.
- 안미정, 2008, 『제주잠수의 바다발』 제주대학교 출판부.
- 泉 靖一, [1991] 1996, 『濟州島』 東京大学出版会.
- 원학회, 1985, 「제주해녀어업의 전개」 『국토지리학회지』 10, 국토지리학회.
- 강대원, 1973, 『해녀연구 (개정판)』 한진문화사.
- 김미영, 2004, 『유교문화와 여성』 살림출판사.
- 金榮·梁澄子, [1988] 1992, 『海を渡った朝鮮人海女一房総のチャムス』 新宿書房.
- 김영돈, 1994, 『제주의민속Ⅱ: 생산기술·공예기술』 제주도.
- , 1999, 『한국의 해녀』 민속원.
- 김영돈·김범국·서경림, 1986, 「해녀조사연구」 『탐라문화』 제5호, 제주대학교 탐라문화연구소.
- 김태능, 1982, 『제주도사론고』 세기문화사.
- 김동현, 2015, 「1964년 작 영화 <해녀> 연구—‘창조’된 표상과 상상의 ‘분할’」 『영주어문』 제29집 영주어문학회
- 김동윤, 2002, 「현대소설에 나타난 제주해녀」 『제주도연구』 제22집 제주학회.
- 권귀숙, 1996, 「제주해녀의 신화와 실제: 조혜정 교수의 해녀론을 중심으로」 『한국사회학』 제30집, 한국사회학회.
- 좌혜경ほか, 2006, 『제주해녀와 일본의 아마』 민속원.
- , 2011, 「해녀문화 전승보존의 과제와 전망」 『제주해녀학술심포지엄 자료 모음집 제주해녀의 재조명』.
- 강권용·권미선 편, 해녀박물관.
- 제주도, 1996a, 『제주의 해녀』 제주도.

- 제주도, 1996b, 『農水産基本統計現況 (농수산기본통계현황)』 제주도.
 제주특별자치도, 2014, 『숨배길배왕눈주지아녀』 電子版.
 高野史男, 1996, 『韓国濟州島—日韓をむすぶ東シナ海の要石』 中公新書.
 조혜정, 1982, 「제주도 해녀사회 연구:성별분업에 근거한 남녀 평등에 관하여」 『한국인과 한국문화』 심설당 pp 143-168.
 ———, 1979, 「한국 해녀촌의 민족지적 연구:노동의 성별분업을 중심으로」 박사논문.
 ———, 1999 (1988), 『한국의 여성과 남성』 문학과 지성사.
 (=チヨ・ヘジョン 2002, 『韓国社会とジェンダー』 春木育美訳 法政大学出版局)
 정수철, 1990, 「제주도 인구성장에 관한 연구」 제주대학교 석사논문.
 한창훈, 1999, 「제주민요와 여성」 『여성문학연구』 1권0호 한국여성문학학회.
 해녀박물관, 2009, 『제주해녀의 생업과 문화』 해녀박물관.
 榊田一二, 1934, 「濟州島海女の地理学的研究」 『大塚地理学会論文集二』
 ———, 1976, 「濟州島海女」 『榊田一二地理学論文集』 東京: 弘詢社
 민경임 1964, 한국해녀의 역사 및 생활상태 이대사원5, 이화여자대학교 사학회
 유철인, 1986, 「제주사람들의 문화적 정체감:주변사회에 있어서의 적응방식」 『탐라문화』 제5호 제주대학교 탐라문화연구소.
 ———, 1999, 「제주 해녀의 몸과 기술에 대한 문화적 접근」 한국 민속학회.
 ———, 2014, 「제주해녀문화 보존방안과 유네스코 등재」 『제주특별자치도』 통권 제118호, 제주특별자치도.
 尹怡景, 2015, 「海女文化の継承可能性に関する考察—韓国濟州島の事例から」 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士論文 (未公刊)